

① プログラム

10:00~10:15

挨拶

実行委員長:山本 理絵(愛知県立大学教授・教育福祉学部長、連携協議会委員長)

大塚 知津子(愛知みずほ短期大学・愛知みずほ大学学長・学校法人瀬木学園理事長)

10:15~10:30

趣旨説明 文部科学省省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課障害者学習支援推進室
室長 小林 美保

10:30~11:00

記念公演 「sutajioCOoca の創作活動と自作紙芝居公演」 横溝さやか

11:00~12:00

文部科学省委託事業成果報告

(1)「生涯学習セミナー」 辻 浩(名古屋大学教育学部・教授)他

(2)「大学連携オープンカレッジ」 杉山 章(東海学院大学准教授)

藪 一之(見晴台学園学園長)他

12:00~13:00

<昼食・休憩>

13:00~16:00

事例報告のねらい コーディネーター:小畑耕作(大和大学教授)、井口啓太郎(文部科学省)

事例報告

A. 学校から社会への移行期の実践 <学校から卒業後へ>

① 「学校から社会への移行期における学びの重要性

—特別支援学校聖母の家学園専攻科の取り組み—

辻 正 (特別支援学校聖母の家学園)

② 「進路さがしは自分さがし」

野上佳代子(やしま学園高等専修学校)

B. 学校から社会への移行期の実践 <卒業後から学校へ>

① 「学校から社会への移行期の学びの場づくり(卒業後→学校)」

小林正尚(社会福祉法人きのかわ福祉会シャイン)

② 「イケてる自分になってハジけたい!!~ファッションショーの取り組み~」

小西 寛之(NPO 法人まなびキャンパスひろしま)

C. ライフステージに応じた学びの実践

① 「名古屋市教育委員会・委託青年学級~瑞穂青年学級 38年の歩み~」

河合賢治(ボランティアサークル汽車ポッポ)

② 「町田市障がい者青年学級と本人活動の会とびたつ会」

松田泰幸(とびたつ会支援者)

☆ (13:00~15:00) 生涯学習セミナー(当事者や学生たちの学び合いのセミナー)

コーディネーター:竹井沙織(中京大学非常勤講師)



16:00~16:30

総括 田中良三(愛知みずほ短期大学特任教授・愛知県立大学名誉教授、本事業コーディネーター)

2020年度（令和2年度）文部科学省「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」 東海・北陸ブロック

障害者の学びの場づくりコンファレンス in AICHI

オンライン開催

<p>【趣旨】 2014年（平成26年）の障害者権利条約の批准等を踏まえ、誰もが障害の有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会の実現、地域における学校卒業後の障害者の生涯を通じた学びの場の拡充を目指し、東海・北陸地域における関係者が共に学ぶオンラインフォーラムです。昨年度に引き続き、「生涯の学びとしての、障害青年の『学校から社会への移行期』における継続的な学習の役割と課題」を中心に開催します。</p> <p>【目標】 ①障害理解の促進、②実践者同士の学び合い、③学び・文化芸術等の機会の充実</p>	<p>【開催日】 2021年1月9日（土）10:00～16:30</p> <p>【配信会場】 愛知みずほ短期大学 （名鉄「神宮前駅」から徒歩10分、駐車場無し。 愛知県名古屋瑞穂区春殿町2-13）</p> <p>※上記会場への参加は、発表者などの関係者のみとさせていただきます。</p>
 <p>記念公演 横溝さやかさん 「studioCOOCAの創作活動と自作紙芝居公演」</p> <p>【横溝さんプロフィール】 文部科学省スペシャルサポート大使 1986年神奈川県生まれ。studioCOOCA所属作家。 競馬・牧場・世界名作劇場をこよなく愛するイラストレーター、アーティスト。代表作のオリジナル紙芝居「ピ・ヨンジュとオレ三世シリーズ」を中心に絵画制作、紙芝居公演、ライブペイントなど様々な創作活動を行っている。</p>	<p>【参加費】 無料</p> <p>【定員】 Zoomでのオンライン参加 200名 ・原則Zoomでのオンライン参加になります。 ・必ず事前にお申し込みください。 ・定員になり次第、締め切らせていただきます。 ・参加申込者には事前に「プログラム集」を郵送します。</p> <p>【参加申込受付】 11月27日（金）～12月25日（金）</p> <p>【参加申込方法】 個人参加の方は、下記の「参加申込フォーム」からお申し込みください。</p> <p>https://forms.office.com/Pages/ResponsePage.aspx?id=mVs5slQiiEG942T1L0Arv2Zru_c_689IsfjBllcabBUN1haVktGWkNssDNXR0s5TTeXQUFHV05VMi4u</p>
<p>【主催】 NPO法人学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会／文部科学省</p> <p>【協力】 全国障がい者生涯学習支援研究会 ／全国専攻科（特別ニーズ教育）研究会 ／愛知特別支援教育研究会／愛知みずほ短期大学</p> <p>【後援】 愛知県・愛知県教育委員会・愛知県社会福祉協議会 名古屋市・名古屋市教育委員会・名古屋市社会福祉協議会 瀬戸市・瀬戸市教育委員会 犬山市・犬山市教育委員会</p>	 <p>【事務局・問い合わせ先】 NPO法人学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会 見晴台学園中学校 電話：052-355-6752 FAX：052-355-6753 メール：daigaku@miharashidai.com</p>

2021年（令和3年）1月9日（土）プログラム 障害者の学びの場づくりコンファレンス in AICHI

9:30～	開 場（Zoom 開室時間）
10:00～10:15	挨拶 実行委員長：山本 理絵（愛知県立大学教授・教育福祉学部長、連携協議会委員長） 大塚 知津子（愛知みずほ短期大学・愛知みずほ大学学長・学校法人瀬木学園理事長）
10:15～10:30	趣旨説明「障害者の生涯を通じた多様な学習活動の充実について」小林 美保（文部科学省・障害者学習支援推進室長）
10:30～11:00	記念公演「studioCOOCAの創作活動と自作紙芝居公演」 横溝 さやか（イラストレーター・文部科学省スペシャルサポート大使）
11:00～12:00	文部科学省委託事業成果報告 ① 生涯学習セミナー ----- 辻 浩（名古屋大学教授、連携協議会委員） ② 大学連携オープンカレッジ ---- 杉山 章（東海学院大学准教授、連携協議会委員）
12:00～13:00	<昼食・休憩>
13:00～16:00	事例検討会（事例報告各20分、質疑応答A・B・C毎に各20分） コーディネーター：小畑 耕作（大和大学教授、連携協議会委員） 井口 啓太郎（文部科学省）
	A. 学校から社会への移行期の実践 <学校から卒業後へ> 事例報告① 特別支援学校聖母の家学園（辻 正） 事例報告② やしま学園高等専修学校（野上 佳代子）
	B. 学校から社会への移行期の実践 <卒業後から学校へ> 事例報告① 社会福祉法人きのか福祉社会シャイン（小林 正尚） 事例報告② NPO法人まなびキャンパスひろしま（小西 寛之）
	C. ライフステージに応じた学びの実践 事例報告① 名古屋市教育委員会・委託青年学級（河合 賢治） 事例報告② 町田市生涯学習センター・障害青年学級（松田 泰幸）
	☆生涯学習セミナー（13:00～15:00）：当事者や学生たちの学び合いのセミナーを対面形式で実施（定員制のため、一般の参加受付不可） コーディネーター：竹井 沙織（中京大学非常勤講師）
16:00～16:30	総 括 田中 良三（愛知みずほ短期大学特任教授・愛知県立大学名誉教授、本事業コーディネーター）

② 記念公演 studioCOOCA の創作活動と紙芝居公演

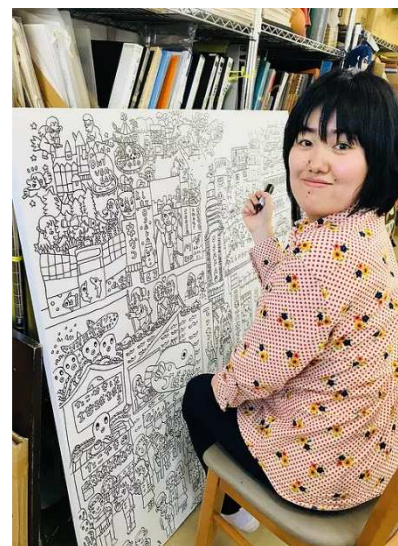
横溝 さやか

(イラストレーター・文部科学省スペシャルサポート大使)

【プロフィール】

競馬・牧場・世界名作劇場をこよなく愛するイラストレーター。主なモチーフは人、動物、風景、世界の国々、オリジナルキャラクターなどなど。オリジナル紙芝居「ピ・ヨンジュとオレ三世シリーズ」や世界の国をテーマにした「世界旅行シリーズ」、子どもや家族の日常をテーマにした「キッズ&ファミリーシリーズ」など数多くのシリーズを制作中。紙芝居などで様々なシーンを描いてきた経験から「〇〇が〇〇しているところ」と言ったシチュエーションを描くことが大得意。

2007年の神奈川県逗子市主催、手作り絵本コンクール一般の部で最優秀賞を受賞し、どんどん作風が細かく丁寧になる。声を使い分けた朗読が得意で、紙芝居公演を行っている。



《略歴》

- 2007年 神奈川県逗子市主催、手作り絵本コンクール一般の部で最優秀賞を受賞
- 2011年 studioCOOCA のパッパラパラダイス！展 / 2k540 AKI-OKA ARTISAN
- 2012年 studioCOOCA のパッパラパラダイス！展 / the art complex center of tokyo
- 2014年 伊藤忠青山アートスクエア スタジオクーカ展 出展
- 2015年 ARTFAIR 東京出展。
- 2016年 studio COOCA のパッパラパラダイス！ / アツコバルー 出展
- 2017年 平塚地下道ミュージアム階段イラストに採用 (右ページ写真参照)
- 2017年 湘南ひらつか七夕まつり公式グッズとして作品が採用
- 2017年 スポーツ庁障害者スポーツ団体支援企業認定ロゴマークに採用
- 2017年 文部科学省スペシャルサポート大使に就任
- 2017年 「ここから アート・デザイン・障害を考える3日間」展へ出展 / 国立新美術館
- 2018年 「ここから2-障害・感覚・共生を考える9日間」展へ出展 / 国立新美術館
- 2018年 日本遺産「大山詣り」ポスターに採用
- 2018年 ONE NATION CUP 2018 ポスターに採用
- 2018年 湘南平塚七夕まつり公式ポスターに原画が採用
- 2018年 文部科学省主催「超福祉の学校」に紙芝居公演とライブペイントで出演

【コンファレンスでの記念公演の概要】

1. studioCOOCA における創作活動

studioCOOCAとは、様々なハンディキャップを持った人が、その人の好きな事・得意な事で活躍する、仕事を得ることを目的に活動する神奈川県平塚市に所在する福祉施設です。絵画・創作・オリジナルグッズ製造・展示販売やパフォーマンス活動を行っています。

今回開催される「障害者の学びの場づくりコンファレンス in AICHI」では、オンラインで視聴されている皆さんにも、studioCOOCAと横溝さやかさんの創作活動の様子が伝わるよう、紹介ムービーを配信します。



2. 紙芝居

オリジナルのキャラクターが登場する自作紙芝居は、横溝さん自身が声色を変え、何役もこなしながら読み聞かせを行います。紙芝居の創作をはじめから早10年以上。数多くの作品の中から、今回披露するオリジナル紙芝居は代表作「ピ・ヨンジュとオレ三世シリーズ」です。お楽しみに！



※文部科学省スペシャルサポート大使について

文部科学省では、共に学び、生きる共生社会の実現に向けた障害者の多様な生涯学習の推進に関する全国的な普及・啓発を図るため、横溝さやかさんを含む8名の著名人を「スペシャルサポート大使」に任命（下記参照）し、広報活動やイベントにおける講演等への協力をいただいています。

「スペシャルサポート大使」には、障害者スポーツや文化芸術活動を含む、障害者の生涯を通じた多様な学習を支援する活動を行う際にも協力を得て、この理念の全国的な普及・啓発を図り、共生社会の実現に向けて、取組を進めています。

- ・東ちづるさん（女優／一般社団法人 Get in touch 理事長）
- ・有森裕子さん（公益財団法人スペシャルオリンピックス日本理事長）
- ・大日方邦子さん（一般社団法人日本パラリンピアンズ協会会長）
- ・金澤翔子さん（書家）
- ・河合純一さん（一般社団法人日本パラリンピアンズ協会理事）
- ・川島成道さん（ヴァイオリニスト）
- ・横溝さやかさん（イラストレーター）
- ・レモンさんこと山本シュウさん（ラジオDJ）

③ 三年間のまとめ

成果報告(1) 「生涯学習セミナー」

辻 浩 (名古屋大学教育学部・教授)

1. 2018年度(1年目)の取り組み

本事業の1年目の取り組みでは、「公開講座」に取り組んだ(2年目から「生涯学習セミナー」として実施)。

テーマを「私もあなたも Happy Life～考えよう！生涯輝き続けるために～」とし、次のような3回のプログラムを実施した。

第1回：今までの Happy 探し～過去にはやさしく～
 第2回：生涯輝き続けるために～未来は楽しく～
 第3回：いつでもどこでも誰でもが学べる社会～北欧の教育事情から学ぶ～

第1回では、自分のこれまでをふり返ることがめざされ、第2回では、自分の未来に思いを馳せる機会をつくることめざされた。そして第3回では、生涯学習がすすんでいる北欧の話聞きながら、これからの日本社会を展望することがめざされた。

このようなプログラムにするにあたっては、青年期の課題として、自分のこれまでを見つめ自己理解を深めることが大切だと考えたが、準備会の中で言われたことは、そのことで自己を肯定的にとらえることができるようにしたいということであった。そのようなことから、これまでの生活をふり返る時には、うれしかったことを思い出すことを中心に考えるとともに、未来のことを考える時にも、実現可能性はあまり考えず夢を語ることを大切にしたい。また、自分たちで話し合うだけでなく、講師の講演も聞けるようにしたいが、どうすればいいかが検討された。その結果、短い講演を聞いた後、グループで感想を出し合って、そこから質問を考えて、それにこたえてもらうことになった。

第1回と第2回は、6人くらいのグループでのワークショップ形式にし、個人でワークシートに記入する作業やグループ内での発表、全体会での発表を組み合わせた。作業の工程を一纏めにせず、細かく区切って説明を行い、うまく作業や発言ができない参加者については、グループに配置した支援者が対応した。また、第3回は、講演を聞いた後、グループで話し合って、質問を考えることに取り組んだ。ここでも、話し合いをすすめ質問に練り上げている過程に支援者がかかわった。

2時間のワークショップが成り立つか心配されたが、ゆったりとした進行の中で、その人なりのワークショップの参加ができ、障害のあるメンバーからは、ワークシートに書くのが楽しかった、自分のことを話せてよかった、みんなで私の夢を考えてくれたのがよかった、他のグループの報告がうまくできてよかった、外国の障害者の大学を知ることができてよかった、といった感想が寄せられた。また、支援者としてかかわった大学生・大学院生も、これまでの自分をじっくりふり返って人に聞いてもらったことがないけれどその大切さがわかった、意見を出しにくい人の話もじっくり聞ける空間に居心地のよさを感じた、その人の言葉を周りにどう伝えたらいいか迷ったがそれもいい経験になった、といった感想が寄せられた。

2. 2019年度（2年目）の取り組み

1年目は「公開講座」と銘打ったにもかかわらず、「NPO法人学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会」が母体の見晴台学園や見晴台学園大学の生徒・学生以外の参加者が限られていたことや、同会が運営する自立支援センターのメンバーと一緒に活動することで高校から社会人までの交流の場にしたいということから、「生涯学習セミナー」として開催することになった。

「生涯学習セミナー」では、障害のあるメンバーと職員、支援者で実行委員会をつくって企画や運営を行った。実行委員会は8回開催され、参加者が対等な立場で考えを出し合うことを原則にしながらも、障害のあるメンバーへの職員による必要な働きかけも行われた。また、実行委員は次のような役割を分担し、それにとまなう係ごとの相談も行われた。

実行委員長：実行委員会の司会、セミナー当日の挨拶、まとめと報告
副実行委員長：実行委員長の補佐
事務・総務係：実行委員会の開催、予算管理
広報・宣伝係：チラシの作成、アンケート用紙の作成・集約、当日の記録
会場係：会場作り、会場誘導、名簿・名札の作成
運営係：防災グッズ作りのデモンストレーション、景品準備、下見、当日の受付

このような企画や運営に携わったことを障害のあるメンバーは、「司会をするのは、すごく大変でしたが、みんなと協力して4回のセミナーを企画してきました。私にとってセミナーをやることは、すごく大変なことだったけど、参加してくれる人たちが楽しかったと思えるセミナーができたと思います。学園で授業をしてる時とは違い、るっくや大学の人たちと話ができるのでとても楽しいです。みんなと楽しい企画が作れてよかったです。実行委員長をやってみて、みんなに意見を聞いたり、企画を考えたりするのは大変だったけど、とてもいい経験になりました。」「準備することが大変でした。雨の中の下見がたいへんだった。みんなでしおりを作っていたいへんだった。でも、みんなが楽しんでくれてうれしかった。とてもよかったです。」「みんなで話し合いしたら、ジブリの歴史、川柳など沢山の意見がありました。その中で自分の意見の地震、防災についてセミナーができてうれしかったです。またやってみたいです。次はジブリの歴史を学びたいです。」という感想を寄せている。ここから、大変なこともあったけれど、みんなのためにがんばり、みんなが喜んでくれたことで報われるという関係性の大切さが見て取れる。また、複数の提案の中から自分の提案が選ばれたことを喜ぶとともに、次の機会には他の人の提案したものを学んでみたいという意見があり、仲間の意見を尊重し、それにも共感できる気持ちが育まれていることは重要である。

また、障害のあるメンバーを実行委員会に送り出した自立支援センターの職員の立場から、「職員に声をかけられての始まりでしたが、セミナー実行委員会を重ねるごとに向かう足取りも軽く楽しげに出かけるようになりました。生涯学習セミナーが“なぜ必要なのか？”という問いに確固たる答えはありませんが、最初は、与えられた役割を受け取る側だった彼女たちが次第に意欲的になり、楽しい勉強になった事、次に学びたい事を発言したことは、委員になった当初は、思いもしなかったこと、普段は自分の思いを表現し伝えることが苦手な彼女たちの嬉しい変化でした。」という感想が寄せられている。与えられるだけでなく企画づくりに参加したことで、普段のセンターでの作業や生活の中では見られない、楽しそうで意欲的な姿になったことが評価されている。

このような学びの場にもなった実行委員会での話し合いでは、プログラムの内容を、スポーツ、学び、文化を楽しめるものにするのが確認され、それにもとづいて、次のような4回のプログラ

ムが実施された。

- 第1回：防災教育～みんなで一緒に生きのびよう！～
 第2回：カローリング大会～名古屋発祥のスポーツで楽しもう～
 第3回：パラリンピック選手に聞くパラリンピックの魅力～河合純一さんに聞く～
 第4回：国宝犬山城・歴史散策～国宝が1つの町にふたつも！欲張り犬山城下町散策～

このような生涯学習セミナーに参加しての感想は、楽しかったというものが多かったが、「今までの学校の勉強と比べてみてどうでしたか？」という問いに対して、「小学校のときの勉強はすきだった。中学校のときは、もう忘れてしまった。高校のときは、仕事の練習をやっていた。だからあまりすきな勉強ではなかった。セミナーは楽しかったし、学んでよかったと思った。」「小学校とか中学校とか養護学校とかでは、たくさんの授業をしていました。私は勉強が好きでした。セミナーもがんばりました。楽しかったです。私は、もっと学びたいです。」という感想が寄せられている。ここには、学校ではたくさんの授業があり、小学校の時には楽しかったものの、次第に職業訓練が中心になって楽しさが失われていったが、生涯学習セミナーでは学びの楽しさを取り戻している様子がうかがえる。

また、自立支援センターの職員の立場から、「利用者との日々の関わりの中で彼らの世界の狭さを感じるがあります。(中略)何かをやりたいと思ってもお金がなかったり、一人では外に出る自信がなかったり、なかなか行動に移せません。そもそも自分が何をやりたいのかわからない人もいます。圧倒的に経験が足りないのです。(中略)セミナーの内容に興味を持って真剣に参加していた利用者もいますが、『面白い話が聞けて楽しかった』『みんなと美味しいものを食べてよかった』と純粋に楽しかったという感想が多く聞かれました。私は、セミナーの内容をしっかりと理解して知識として吸収することが『学習』だと思っていましたが、そうでない場合でも、みなさんが『経験した』ということが何より学習になっているのだと感じました。」という感想が寄せられている。ここでは、狭い世界に閉じこもりがちになる障害のあるメンバーにとって、生涯学習セミナーで「経験」を増やしていくことが重要な「学習」であることが指摘されている。

3. 2020年度(3年目)の取り組み

3年目は2年目を踏襲して、実行委員会を設けて生涯学習セミナーの企画をつくり、次のようなプログラムになった。

- 第1回：ボッチャ大会
 第2回：イラストの作品鑑賞と話し合い(仮)

今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大という状況の中で、実施回数を少なくせざるをえず、実行委員会もセミナー当日も感染に注意を払いながらすすめることになった。

また、イラストの作品鑑賞と話し合いでは、オンラインで実施するという選択肢も含めて、どのようにすれば100人規模の企画にすることができるかを話し合った。この機会にオンラインでの実

験を行うことも考えられるが、生涯学習セミナーが障害のあるメンバーにとって大きな楽しみであることから、招聘することになっているイラストレーターと実行委員会で粘り強い交渉がなされている。

4. 生涯学習セミナーから見える「学校から社会への移行期」の学びの課題

以上の3年間にわたる生涯学習セミナーの取り組みから、障害のあるメンバーの「学校から社会への移行期」の学びの課題として、次のようなことが見えてきた。

①企画・運営を行う実行委員会も学習の場として大切にすること

実行委員会に参加することは、大変だけどみんなのためがんばる、自分の意見を言う、他の人の意見にも共感するなどの意義がある。難しいことは職員が担うことになることもあるが、できることをすることで、意欲が湧き、楽しい気持ちになる。

②あらたまった場のもつ意味を大切にすること

実行委員会やセミナー当日の開会あいさつ、それぞれの役割の遂行などは緊張する場面ではあるが、普段の生活とは違いみんなから注目されることで、大きな達成感を味わい自信につながる。

③自分の人生のふり返りは肯定的なことに気づくことを中心にすること

自分を見つめることは青年期の課題として大切ではあるが、そのことで自信が芽生え、明るい気分になるために、うれしかったことや誇りに思っていることなど、肯定的なことに注目することが必要である。

④ワークショップは個人での作業とみんなに聞いてもらうことを組み合わせること

個人の作業のために使いやすいワークシートを用意し、自分が書いたものを使いながら発表することが望ましい。また、ワークショップの進行の指示は細かく区切って出すことで、変化があつて飽きずに取り組むことができる。

⑤講演についてはグループでの話し合いを通して質問に練り上げること

講演を聞くことは集中力が続かず難しい面があるが、講演を受けてグループで話し合う中で質問に練り上げていくことで、内容を咀嚼することができ、講師との応答的な関係もできて満足度が高まる。

⑥新しい経験、楽しい経験をすることも大切にすること

障害のあるメンバーの日常生活は変化に乏しいことが多いので、知識を身につけることだけを学習とは考えず、新しい経験や楽しい経験をすることに、世界が広がるという積極的な意義を認める。

⑦日常の生活の場での信頼関係を基盤にすること

学校や職場など日常の生活の場での障害のあるメンバー同士や職員との信頼関係があることで、あらたまった場で新しいことをすることに少し緊張するけれど、参加してみようという気持ちになる。

⑧職員も支援者とともに学ぶこと

自分の人生をふり返り肯定的に自己をとらえることは職員や支援者にも必要なことである。また、障害のあるメンバーが実行委員会やセミナーで見せる普段とは違う態度からその人の理解を深めることも可能になる。

【生涯学習セミナーに参加した青年からの報告】

おはようございます。これから生涯学習セミナーの報告をします。1年目の取り組みは見晴台学園大学3年の古川、2年の丹下が報告します。よろしくお願いします。

1年目の講座のタイトルは、「私もあなたも Happy Life～考えよう！生涯輝き続けるために～」でした。私たちは3回の講座で、自分のこれまでを振り返り、これから Happy に生きていくためにはどんなことが大事かを考えました。

1回目は、今までの Happy 探し～過去にはやさしく～というテーマで、自分の過去をふりかえりました。

「家族とキャンプに行ったこと」

「学園の卒業生と休み中に遊んだこと」

「中学校の文化祭でお化け屋敷をして

お客さんがおどろいてくれたこと」

「好きなバンドのライブに行ったこと」

「犬山の花火大会を見に行ったこと」

などのハッピーが出ました。

だれかのハッピーに気持ちがほっこりしたり、日常のすごくちっぽけなこともハッピーに思えるようになったり、すごく楽しい時間が過ごせました。

2回目は、「未来は楽しく」をテーマに、自分の夢を出し合い、その夢を叶えるためには、どうすればよいのかをみんなで考える“あなたの夢かなえますプロジェクト”でした。

みんなの夢は、一人暮らしがしたい、ペットショップで犬の世話をしてみたい、バッティングセンターでたくさん打ちたい、結婚したい…などいろいろありました。

例えば、「バッティングセンターでたくさん打ちたい」という夢の実現のためには、「週に何回も通う」「家で筋トレをする」「お金を貯める」などの意見が出てとても盛り上がりました。

この2回目の講座では、「自分の夢を話すことは、勇気がいるけれど、みんなに聞いてもらえてうれしかった。」「みんなが自分の Happy に共感してくれたり、夢に『すごいね』と言ってくれたことがよかった。」「自分の夢に対してグループのみんなが真剣に考えてくれたのがうれしかった。」「みんなの夢が聞けたのが良かった、夢があっても、どうしたら叶えられるかわからないことが多いけど、いろんな人からアドバイスを聞いてうれしかった。」など感想が出ました。



3回目は東京学芸大学の高橋智先生に、生涯教育が進んでいる北欧の教育について教えてもらいました。高橋先生は「外国にも見晴台学園のような学校がないのか、と思って調査をはじめた」と言われました。

今回はスウェーデンのフォンビィ大学について話をしてくださいました。フォンビィ大学はスポーツ活動やクッキング、木工などの制作活動や 課外活動をたくさん取り入れているところなど、なるほど！ぼくたちの大学と雰囲気がよく、にているなど

思いました。その中で、「朝の昼寝」というプログラムがあるのにはみんな驚きました。一日二回あるフィーカというティータイム、授業の中で行うエクササイズは早速見晴台学園大学でも取り入れました。日本以外でもこういう場所があったことを初めて知ることができたてよかったです。

公開講座では、チューターやほかの大学の学生さん、先生と交流できたいい経験になりました。講座を3回全部に参加すると修了証がもらえましたが、これはがんばって参加したことを認めてもらえた気がして、次もまた参加しようという気持ちになり、受講者に好評でした。この講座を受けて、学校という場所を終えても学ぶことができるのはいいなあと思いました。

続いて2019年度の活動報告をお願いします。

2年目からは「生涯学習セミナー」として行いました。ここからは、当時実行委員の自立支援センターるっく職員の井上雅博と「るっく～あるて」社員の土師桃果、病院で清掃業もしています松本蒼未の3人で報告させていただきます。よろしくおねがいします。

2019年度は4回のセミナーを開催しました。延べ317名の方に参加してもらいました。青年たちを含めた実行委員会を発足し、当事者の青年たちも役割を担って企画・運営を行いました。当時、私たちは運営係として「新聞紙での防災グッズ作りのデモンストレーション」、「カローリング大会の景品準備」、「河合純一さんへの事前アンケートの作成」、「当日の受付」を行いました。現地の下見をして「ワークシート」も準備しました。

それでは開催したセミナーを紹介いたします。

第1回「防災」～みんなで一緒に生きのびよう！～

名古屋市港防災センターの近藤さんをお招きして「楽しく防災」を学びあいました。

第2回「カローリング大会」

名古屋発祥のスポーツを16チームに分かれてみんなで楽しみました。

第3回「河合純一さんに聞く～夢追いかけて～」

パラリンピック競泳金メダリストの河合さんから多くのことを学びました。

第4回「国宝 犬山城 歴史散策」出張セミナー

出張セミナーとして犬山の歴史に触れ、食べ歩きも楽しみました。

そんな4回のセミナーを通じて感じたことを松本さんに振り返ってもらいます。



「セミナーに参加してみてどうでしたか？」

「カローリングとか犬山とか楽しかった。なかまたちがいると楽しかった。自分も勉強になったと思いました。」

「実行委員をやってみてどうでしたか？」

「準備することがたいへんでした。雨の中の下見がたいへんだった。みんなでしおりを作っていたへんだった。でも、みんなが楽しんでくれてうれしかった。とてもよかった。」

「今までの学校の勉強と比べてみてどうでしたか？」

「小学校のときの勉強は好きだった。中学校のときは、もう忘れてしまった。高校のときは、仕事の練習をやっていた。だからあまり好きな勉強はなかった。セミナーは楽しかったし、学んでよかったと思った。」

現在、働いている彼女に今はどう思っているのかを聞いてみました。

「生涯学習セミナーのような学ぶ場があったら働きながらもまた学びたいと思いますか？」

「またカローリングがあったら参加したい。食べ歩きとかまたしてみたい。つごうがあえばまた参加したい。」

続いて土師さんに当時のことを振り返ってもらいます。

「セミナーに参加してみてどうでしたか？」

「自分の希望した防災を学べて一番良かったです。地震の歴史が沢山学べました。これからも沢山のニュース情報で災害を沢山学びたいです。」

「実行委員をやってみてどうでしたか？」

「受付係をがんばりました。この経験が良かったです。みんなで話し合いしたら、ジブリの歴史、川柳など沢山の意見がありました。その中で自分の意見の地震、防災についてセミナーができてうれしかったです。またやってみたいです。次はジブリの歴史を学びたいです。」

「今までの学校の勉強と比べてみてどうでしたか？」

「小学校とか中学校とか養護学校とかでは、沢山の授業をしていました。私は勉強が好きでした。セミナーもがんばりました。楽しかったです。私は、もっと学びたいです。」

土師さんは、セミナーを通じてもっと学びたい気持ちが膨らみ現在は進学を 目指しています。そんな現在の気持ちを聞いてみたいと思います。

「なぜ見晴台学園大学校への進学を希望されたのですか？」

「私は、一年目の時セミナー発表会の時にもっと学びたいと思いました。就職ではなく進学の道もよいかと思いました。そこで自分が具体的に思ったのは見晴台学園大学校です。セミナーで交流会をしていたのでそう思いました。大学に行ってもしっかり頑張りたいです。セミナーは、自分が希望した事が学べたし、皆で仲良く仲間と一緒にとても本当にステキな学びの機会でした。」

これで2年目の報告を終わります。

生涯学習セミナー2020 ボッチャ大会の報告をします。報告者は見晴台学園高等部本科3年の佐藤悠太と見晴台学園高等部専攻科1年の高木詩乃です。

今年は新型コロナの影響で1回しか行うことができませんでした。それが2020年11月9日曜日に名古屋市の中川区にある露橋スポーツセンターで行われたボッチャ大会です。名古屋市障害者ス

生涯の学びとしての、障害青年の「学校から社会への移行期」における継続的な学習の役割と課題

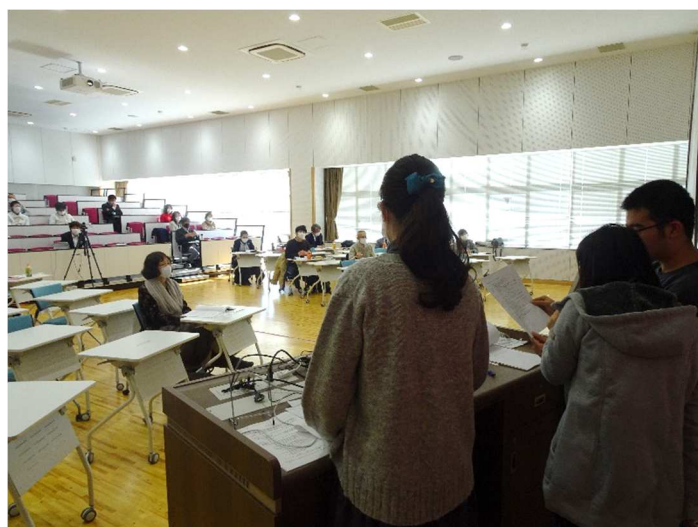
スポーツセンターの職員の方にルールや試合のやり方などを教えてもらい、チームに分かれて試合を行いました。ボッチャのルールは難しくなく、すぐに覚えることができました。投げるボールが意外と重たくて驚きました。投げてみると思ったところに投げるのがとても難しかったです。目標に当てるのが難しかったけれど、やってみると楽しいスポーツでした。初めて同じチームになった人とも話をすることができました。

初めてボッチャをやりましたが、投げてみると難しく、ボールを転がす強さの調整が必要でした。目標の白いボールに近づけることができないので、簡単そうに見えるけどなかなか難しいスポーツだと思いました。でも、だんだん慣れてくると思ったところに投げれたし、どこに投げるかで試合展開が変わり、戦略が深くて楽しかったです。

私は実行委員会の副実行委員長をしました。ボッチャ大会当日は参加者の前で選手宣誓をしました。たくさんの人の前だったので少し緊張しましたが、大きな声でできました。

僕は会場係の仕事をしました。コートや準備やトーナメント表などの準備がありましたが、うまくできました。実行委員会はそんなに大変ではなかったです。ボッチャは奥が深くて楽しかったのでまたやりたいと思いました。

生涯学習セミナー2020の報告を終わります。ありがとうございました。



成果報告(2) 「大学連携オープンカレッジ」

杉山 章(東海学院大学人間関係学部子ども発達学科・准教授)
藪 一之(見晴台学園学園長)

I. 三カ年の「大学連携オープンカレッジ」の取り組み

委託事業がねらいとする学校卒業後の障害青年のための学習プログラム開発を目的とした実践研究として大学連携オープンカレッジが大切にしたのは、①異なる大学間の連携、ネットワークを構築し共同でオープンカレッジを運営・開催すること、②学びたい障害青年と同世代の大学生等支援者が対等な関係で協力し合える取り組み内容をつくること、の二点である。以下、三カ年の大学連携オープンカレッジの概要とその構造化、課題についてまとめてみた。

1. 2018年度(1年目)

1年目は連携協議会委員として本事業に参加した大学教員の協力を得て地域の五大学等(名古屋大学、愛知県立大学、東海学院大学、中京大学、愛知みずほ短期大学)と事業実施団体のNPO法人学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会が運営する見晴台学園大学校、見晴台学園高等部専攻科が相互に訪問する形で「大学間交流授業」(計5回)を実施し連携を計った。

並行して取り組んだ大学連携オープンカレッジは、書家で文部科学省スペシャルサポート大使の金澤翔子氏を招き揮毫と講演会を企画した。オープンカレッジは講演会を挟む形で開催し、第一回は金澤翔子氏の活動を動画で学び、講演会の進行を確認した上で当日の役割を分担した。第二回が講演会で、障害青年と学生ボランティアが会場設営、受付、司会、質問係などの役割を務め、見事に講演会のもう一方の主役として活躍した。第三回は講演会を終えての振り返りと次年度のオープンカレッジへの希望を出し合った。

2. 2019年度(2年目)

1年目の成果から障害青年と学生ボランティアが協力して役割を担う活動が彼らの学習意欲を高め、達成感の獲得につながる点に展望が開けたことを受けて、2年目は自分たちが教える立場で子どもたちと関わるキッズワークショップを企画した。紙飛行機作家で連携大学の東海学院大学教授アンドリュー・デュアー氏を講師に、第一回はデュアー氏が日本に来て現在に至る生き方を民放の番組で鑑賞、紙飛行機が飛ぶ原理を講義形式で学んだ。第二回はキッズワークショップに向けて子どもたちに教える紙飛行機をまずは自分たちが作って飛ばしてみることを中心に、当日のグループや役割を話し合っ決めて。第三回がキッズワークショップ本番で、当日は名古屋市瑞穂児童館の協力で幼児・小学校低学年の子どもたちと家族34名を迎えた。障害青年と学生ボランティアは子どもたちに楽しく参加してもらえるよう会場設営や横断幕製作、受付などの役割を担い、さらにグループに分かれた子どもたちがデュアー氏の指導で紙飛行機を制作、思い思いに飛ばして遊ぶ場面では子どもたちを支援する立場で活躍することができた。第四回は当日の様子を写真で振り返り、改めて紙飛行機を作って交流した。

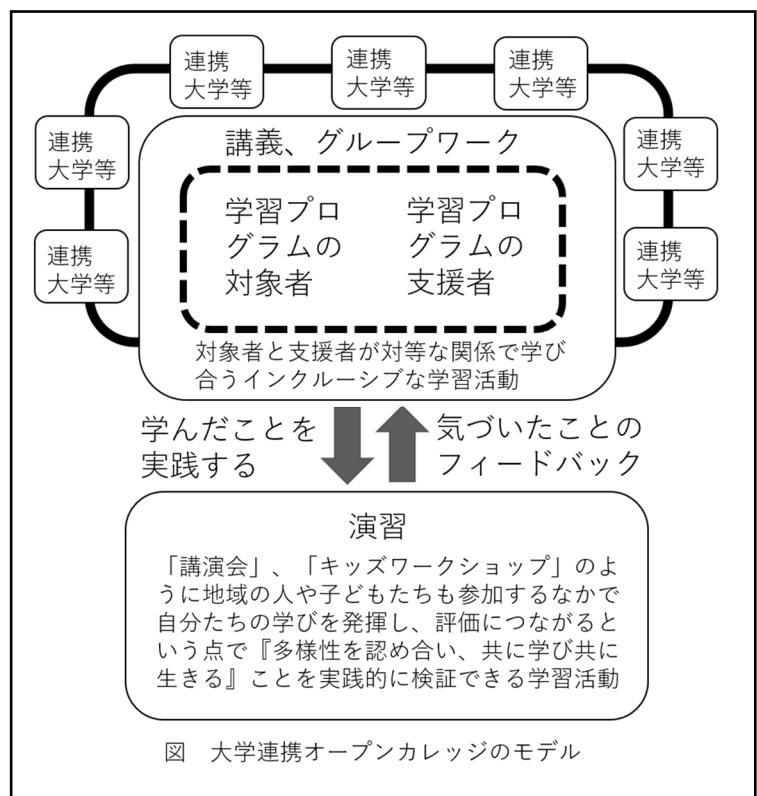
3. 2020年度(3年目)

新型コロナウイルス感染拡大の先行きが見えないため、継続発展させたかったキッズワークショップの企画を断念、大学連携オープンカレッジそのものの開催も危ぶまれたなかで第一回をオンライン開催で行うこととした。内容は前年に引き続きデュアー氏を講師に招いて紙飛行機がテーマである。普段の活動拠点の学校、事業所4箇所をzoomでつなぎ、紙飛行機の講義と制作を行った。障害青年と支援者がオンラインで交流できるのが不安視されたが、互いの学校紹介や画面越しに飛行機を飛ばす様子を見て歓声をあげるなど、同時間を共有する取り組みとして成立できた。反面、役割を持って主体的に参加する点では事前準備に工夫が必要であった。第二回は感染防止に最大限考慮した対面形式で行い、オンラインで作った紙飛行機を持ち寄って交流のきっかけとし、混在したグループで新たな紙飛行機制作し関係を深めた。

4. 大学連携オープンカレッジが示す学校卒業後の学びの可能性

下図は3カ年の取り組みから大学連携オープンカレッジのモデル化を試みたものである。障害青年と学生ボランティア等支援者は講義やグループワークで一義的な学習に参加する。そこには連携大学の支援協力を得て青年期の興味関心に寄せた学習内容や人材の提供が可能となる。障害青年は支援者の学生ボランティアと共に学習活動に参加し、同世代青年同士の交流を通して学び合う関係を構築していく。そこで学んだ成果を演習で発揮し、役割を担って主体的に演習に取り組むことで学びを一層深化させ、達成感や自分への自信を得ることができる、というイメージである。

コロナ禍のため最終年度の課題としていた連携大学との関係提携やキッズワークショップの定例化が実現できなかったことは悔やまれるが、集団での交流が再び可能となった将来、大学連携オープンカレッジモデルが学校卒業後の障害青年の多様な学習活動の一例として地域の実情に合わせて普及する可能性は大いにあると言える。



5. 大学連携オープンカレッジに参加した大学生の意識

共に学ぶ大学生は、どのように感じているのか振り返る。日常の講義の中で、学生に過去の交流及び共同学習の経験を聞くと、学生によって経験に大きな差がある印象を持っている。

(1)2018 年度

大学間交流授業より(東海学院大学)

- ・授業・目的: 保育実習指導 I(演習): 乳児への対応を学ぶ: ベビーケアモデルを用いて、乳児ケアを学ぶ。授業後、カフェコーナーで交流会を実施した。
- ・授業の様子: 3 グループに分かれ、それぞれベビーモデルを用い、抱き方とオムツ交換を体験し、抱き方や男女によるケアの違いについて学んだ。その後、学びや感想等を交流した。
- ・ワークシートより

学生: 「人によって乳児への反応が異なることが分かった」「教えることもあり、自分の中により詳しく入った」
「自分が普通にできることができない(難しい)人があるし、その逆もある」

障害学生: 「ウンチのケアは男の子と女の子でふきかたがちがうのでむずかしかったです」「おもさがあって命をあずかることが必要などうさもあることがよくわかりました」「ぼくはべんいのものにすのでさわるのがにがてなのですが赤ちゃんのおむつがえがだいじなばしょのえいせいめんやびょうきにならないためのとてもだいじなさぎょうなのだというのがわかりました」

(2)2019 年度

全四回について、大学生(東海学院大学)に、関わりや気付きについてアンケートを実施した。

第一回

「よく話しかけてくれた」「会話をしているととても楽しかったと感じた」

第二回

「飛行機一つでもその人なりのこだわりっていう物を理解し合えた」「飛行機を飛ばしてる時に一緒に飛ばしてみたりして楽しかった」「出来そうかどうかを聞いたりして、関わろうとすることができたと思う」

第三回

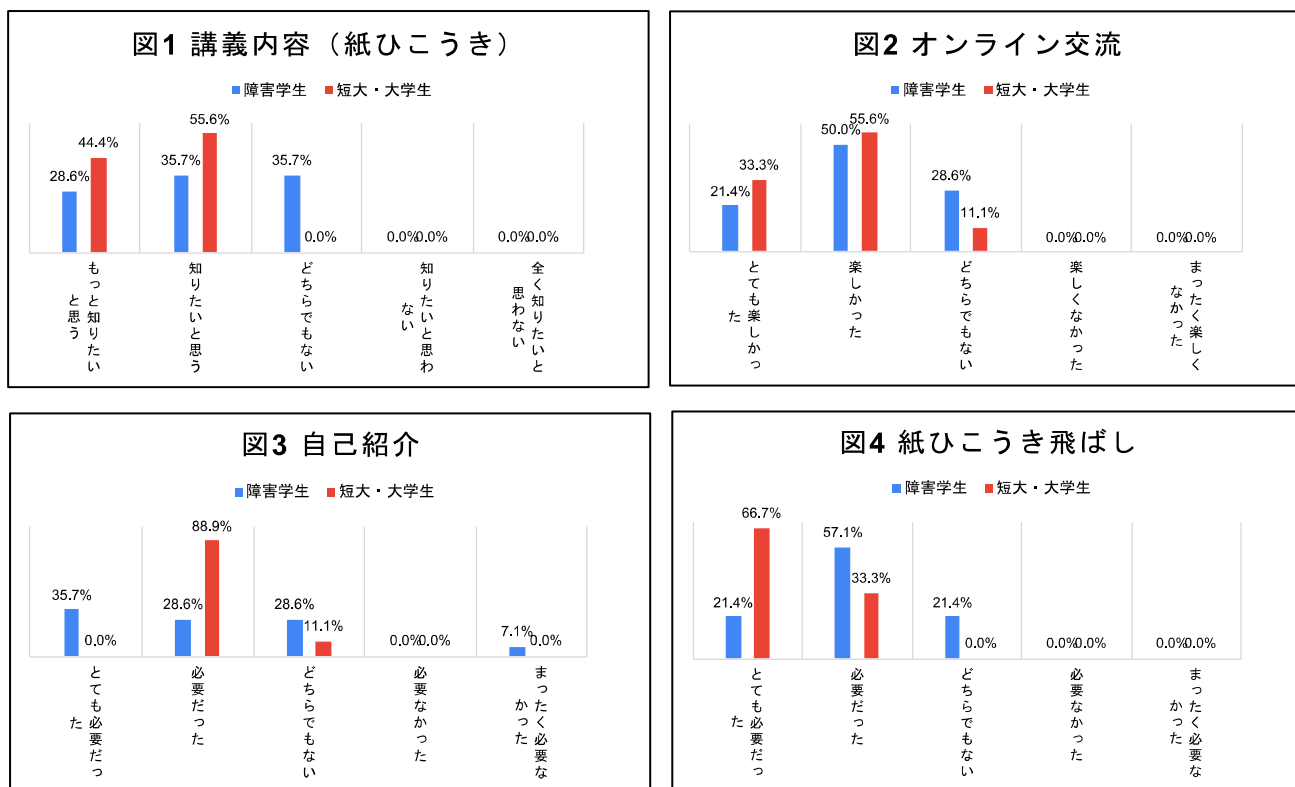
「昨年に引き続きの参加ということで、自分の中で顔や名前が一致している方が多く、積極的に話すことができた」「見晴台の方々も紙飛行機作りを子どもたちに教えようとしており、準備から活動までその想いが実現できるように声をかけたり保護者や子どもたちと繋ぐことができるようにと考え関わりました」「多くの人と関わる中でも緊張するのは皆同じでお互いに自分の持ち味を出しながら他者と関わっていた」「地域の方や保護者の方が彼らに向ける疑問や戸惑い好奇の目などを取り払い、両者をうまく繋ぐために私達学生や関係者が何をできるかを考えていかなければいけないと感じるきっかけになりました。」

第四回

「様々な人の得意不得意というものへの理解や、互いに認め合い、そして助け合うことがコミュニケーションをとっていく中で可能になるんだと気づいた」

(3)2020 年度

オンライン交流後にアンケート(Web 回答と質問紙の選択。同内容)を実施した。アンケートは授業内容や交流及び共同学習、交流相手への意識、活動について尋ねるものであった。下記は第一回の事後アンケート結果の一部である。



<考察>

2018 年度の実践から、学生は、人の多様性について考える機会や自身の学修が深まる機会になったことが窺えた。障害学生の記述からは、配布物や授業の形態や課題提示の配慮により、全員ではないが、ねらいに沿った学修をすることができる可能性を感じた。

2019 年度の実践は、日常的に関わりが少ない学生と障害学生が第三者を対象にしたワークショップを運営する取組であった。学生にとっては、回を重ねるごとにお互いの理解が深まったと考える機会となったり、第三者が参加することで、広い意味で対人援助に関わる専門性を考えたりする機会となったことが窺えた。

2020 年度の実践は、第二回目の実践前であることから、事前事後の比較は今後の課題とする。図1や図3、図4から障害学生を対象とする講義は、非常に難しいが他の実践者によって語られるように当事者性の観点が重要だと考えられる。反面、図2からオンラインによる実施は、障害学生も学生も同様に楽しめたと考えられる。

【当日参加した青年たちの報告】

私は見晴台学園教員の青木です。大学連携オープンカレッジは、この事業がはじまった3年前から毎年行ってきました。大切にしてきたことは、この地域の大学に通う学生と障がい青年たちが通う見晴台学園、見晴台学園大学の生徒・学生とが、よくある教える側と教えられる側、助ける側と助けられる側という関係ではなく「共に学ぶ(学び合う)」ということです。具体的には、障がいの有無に関係なく全ての学生が同じように役割を担い準備をしたり、メイン企画当日の運営に携わったりしてきました。

今日は代表で4名の青年たちがこの場に来てくれています。所属や学年が異なるため3年間とも参加した人もいれば、そうでない人もいますが、自分にとって最も印象に残っているがんばったことや楽しかったこと、うれしかったことをピックアップしてもらい成果報告とさせていただきます。それでは、みなさんよろしくお願いします。

松生：この写真は、1年目のメイン企画、金澤翔子さんの席上揮毫と翔子さんのお母さんによる講演会の様子です。私は大学連携オープンカレッジに3年間とも参加しています。その中で1番がんばったのが、1年目にたくさんの人の前で司会をしたことです。むずかしい言葉がたくさんあって、すごく緊張しました。でも、当日一緒に司会をしてくれた中部大学の学生さんと打ち合わせをしたり、翔子さんにあいさつに行ったりするうちに仲良くなって、安心できました。本番は、しっかり司会ができたと思うし、楽しかったです。他の学校に通うに学生さんと一緒に司会できるのがすごいことだなと思いました。



江川：次に2年目と3年目に行われた大学連携オープンカレッジについて話します。この2年間は、アンドリュー・デュアー先生に紙ひこうきの作り方を教えていただきながら、地域の大学に通う学生さんたちと交流したり、いろいろな役割を担当したりしてきました。今年はコロナウイルスの影響で実現できませんでしたが、去年はメイン企画として、瑞穂児童館とタイアップし 幼稚園や小学校に通う子どもたちとも交流することができました。

藤坂：僕は、おりがみや工作が苦手なので最初は少し不安でした。でも、できあがった紙ひこうきをみんなで飛ばして競争するのは、とても楽しかったです。紙ひこうきを作ることはむずかしかったけど、

生涯の学びとしての、障害青年の「学校から社会への移行期」における継続的な学習の役割と課題

普段なかなか交流ができない他の大学に通う学生さんたちと助け合うことができました。会場係や受付なども役割分担してがんばることができました。



金澤：私は、昨年のキッズワークショップが印象に残っています。私は受付の担当でした。この日は、それまでに交流してきた学生だけでなく、はじめて会う子どもたちやお母さんたちも参加することになっていました。さらに、チームを分けるためのくじ引きや子どもたちには子ども用に名札を渡すなど、やらないといけないこともたくさんあってとても緊張していたのを覚えています。でも、なんとかやりきることができました。ワークショップでも優しく小さい子たちに声かけられたと思います。去年は、大学連携オープンカレッジの成果報告として 全専研でも発表しました。ヘルパーさんに手伝ってもらいながら一人暮らしもしています。まさか大学に行けるとは思っていなかったけど、いろいろな経験ができて大学に来てよかったと思っています。

江川：私は、去年の大学連携オープンカレッジから参加しています。最初は初めて会う学生さんたちと交流できるか不安だったけど同じくらいの年齢の人ばかりだと分かって、一緒にがんばれそうと思いました。キッズワークショップに向けた話し合いでは、司会もやりました。ワークショップ当日、学生さんたちが上手に小さい子たちと話しているのに、私はできなくて戸惑いました。でも、名札を見せて自己紹介したり、しゃがんで話してみたり、学生さんたちのマネをしながらがんばりました。普段は、教えてもらっているけれど 自分が先生になって教える経験はなかなかできない経験だったので、とても新鮮でした。私は、大学連携オープンカレッジに参加して、普段あまり関わるることができない学生さんと一緒に紙ひこうきを作ったり、司会をしたり、準備を協力してできてよかったと思います。これで、私たちからの報告を終わります。ありがとうございました。



【大学連携オープンカレッジの取組における自分の中の気づき】

私は、このオープンカレッジに昨年度と今年度に参加をしました。きっかけは杉山先生に「参加してみない？」と誘われたことでした。私は特別支援学校の教員になるために大学で勉強をしているとともに、これまでに障がいがある方と何度か関わったことがあったので、これはより深い学びができるいい機会になるのではないかと思って参加することにしました。

このオープンカレッジでは、障害のある学生や他大学の学生と一緒に紙ひこうきを作ったり、飛ばしたりしました。

昨年度は名古屋にある児童館で地域の子どもたちとその親御さんのためにワークショップを行いました。その際には、「こんなところがいいね。」や「こうするといいんじゃない？」などと交流や教えあいをしたり、わからないところもデュアー先生に聞いたりして楽しく協同的にワークショップを行うことができました。

しかし、今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大を受けて、リモートで1回、会場で対面で行ったのが1回の合計2回しか行うことができませんでした。それでも、工夫して楽しく行うことができました。2回目のときにグループでした感想交流の中で、「ほかの大学の学生との交流ができて楽しかった。」という感想や「リモートだとわからなくてもそのままどんどん先に進んでいってしまうから困ったけど今回顔を合わせて行ってみたら、わかりやすくより楽しくできた。」という話が出ました。それを聞いて、確かにリモートになると教えあいや交流などが難しくなると気づきました。

これらから、実際に会って交流することによってわからないことなどをそれぞれのペースに合わせて教えあいをしたり、楽しさをより共有したりすることができると感じ、とても大切なことだと思いました。そして、人と人との交流はとても大切なものでなくしてはいけないと思いました。

(東海学院大学 人間関係学部 子ども発達学科 3年 松尾明香)

私は、今回でオープンカレッジに参加するのは3度目となります。毎年開かれるごとに参加者の人数が増え、実施される内容も地域に根差した内容で少しずつ規模が大きくなってきて感じています。3回目となる今回のオープンカレッジでは集合するだけでも大変な時期にも関わらず参加者は昨年よりも多く感じ、紙ひこうきの作り方についてお互いに悩み、相談を繰り返しながら学ぶことができましたと思います。

大学連携オープンカレッジの紙ひこうき制作では、私のグループ内では飛行機を作る過程でオリジナルティを取り入れてみたり、完成した紙ひこうきに自分の好きなものを描いてみたりと非常に個性豊かなメンバーが集まっていました。飛行機の作り方一つでも独特な考えが含まれており、意外性と好奇心が常に不随する時間を過ごすことができました。特に、紙ひこうきをうまく飛ばすために見晴大の人とこうすれば飛ぶのではないかと試行錯誤しながら学んだときが一番印象に残りました。

作った人や紙ひこうきによって、飛ぶ距離や飛び方が変わるのは当然だが、飛行機がうまく飛んだ、飛ばなかった際に多くの学生がうまく飛ぶ、飛ばない理由を一生懸命に考えながらうまく飛ば

すために推測し、考えを実行に移すこの企画は自身の大学だけでなく別の大学生と考えを共有するだけでなく、自分を見知った人でなく初めて出会った学生たちが相手の考え方や感じ方を試行錯誤しながら学べる。つまり、紙ひこうき作りを通して、青年期における人間関係や人間観を学べる機会になったと感じています。

私は将来、小学校教諭を志望して学んでいる身ですが、このオープンカレッジを通して、児童生徒や教員間との人間関係を学ぶことだけでなく、友人や同年代の同僚とのかかわり方や人間観について視野を広げることができたと感じました。

(東海学院大学 人間関係学部 子ども発達学科 3年 角野友彦)

【講師の立場から】

こんにちは。今回講師を務めたデュアーと申します。東海学院大学の先生と附属幼稚園の園長もやっています。

趣味として紙ひこうきをずっとやっているのですが、去年に続けて、紙ひこうきを皆さんと一緒に作ることにしました。去年の時は皆が同じ部屋で集まってやったという関係で、和やかな感じでしたけれども、講師としての自分の存在が、その中でかなり大きかった感じがしました。今年は違う飛行機を作ることにしまして、1回目はわりかし簡単な飛行機で、切って折って、ホチキスで止めるものにしたので調整しやすい間違っただらば作り直しやすいというような仕組みのものにしました。2回目は切っただけで組み立てる飛行機にしました。クリスマスのすぐ近くだったので、せっかくのクリスマスの雰囲気を出すために、クリスマスツリーひこうきになるような感じで、白い紙製のひこうきに自分なりの絵を描いて楽しむことができました。みんなと同じひこうきにならず、むしろ自分がクリスマスツリーをイメージしたものを作るという楽しめる場面も多くありました。

今年度、やってみて思ったことは、昨年と違って本来集まることによって成立する自分と参加者、参加している学生とそして学生同士の交流が、かなり違った雰囲気になりました。1回目はそれぞれ別々に大学に集まって、いくつかの拠点ごとにみんなが直接会っていたわけですが、それで自分がいる部屋（拠点）ではとりあえず学生たちと直接触れて手を出しながら指導できたんですけど、他の部屋（拠点）ではそれができず、出来上がったときの差がいろいろありました。

でも、講師としての私が学生と交流する代わりに、学生同士がもっと熱く交流しなければいけなかった。昨年は私が直接皆さんに1対1で指導ができたのですが、今回はそれができなかったために、分かっている学生が他の学生に教えるというような仕組みになって、いい塩梅に交流ができるようになりました。ただし、それぞれの部屋はそれぞれの拠点になって、他の部屋で何をしているかというのはあまり意識しなかったというのはちょっと残念でした。

2回目、学生たちは、全員同じ部屋に集まって直接交流はできましたが、私自身は事情があってオンラインで参加せざるを得なくなってしまうので、カメラを通して指導しました。その結果手元の作業を大きく写すことができたので、見ている学生は、作り方とかをよく見て、細かく作業とかを学習することができた。いざ実際に自分で作るとなると、どうだっけっていうふうになら

る覚えの部分、他の自分の周りの学生とかに聞きながら進めて行かなければいけなかった、一部の学生にとってそれは直接私から指導を受けるよりやや難しかったという話も聞きましたが、実際に出来上がった飛行機を飛ばしている姿を見ると、まったく問題なくできたと言う、ちょっとだけ苦労した分、やはり自分の達成感が大きかったようには見えました。飛ばすときの自分は声掛けがあまりできなかったというのは残念だったけれども、カメラに持ってきて、これはどうですか、何が違うんですか等、ある程度指導が出来たので講師としての務めを果たすことは、なんとなく出来ました。しかし学生同士が私にではなく自分たちに頼るといったことになったのは、非常に却ってよかったと、結果としては学生にとってはとても熱い交流になったと思いました。

さらに自分で眼前で指導するときは障害のある学生とそうでない学生あるいはその先生方と、それぞれ対応が違いましたが画面を通してみるとその違いがわからなくなってしまいますので、自分としてはみんなに同じようにあたることができ、それが却ってよかったと、むしろ思いました。私も一緒に飛ばしたかった。そういう楽しみは私にはなかったですが、みんながよく交流できて、安心した気持ちだけではなく、非常に良かった。みんなは素晴らしい、よく頑張りましたというふうに思って、非常に楽しいワークショップになりました。良かったです。

(東海学院大学 教授 附属第一幼稚園 園長 アンドリュー・デュアー)



5-2. コンファレンス連動企画事業

共生社会をめざす生涯学習 in 犬山!!

— 「障害者の学びの場づくりコンファレンス in AICHI」 連動企画 —

横溝さやか（イラストレーター、文部科学省スペシャルサポート大使）

紙芝居公演と作品展

公演日時 令和3年1月10日（日）11：00～

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止

展示会日時 令和3年1月10日（日）13：00～15：00

1月12日（火）10：00～15：00

1月13日（水）10：00～15：00

1月14日（木）10：00～15：00

1月15日（金）10：00～15：00

※犬山市の関係者による作品展も同時開催

会場 犬山市民交流センターフロイデ

主催 NPO法人学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会／文部科学省

協催 犬山市障害者自立支援協議会

後援 犬山市、犬山市教育委員会



<はじめに>

今回の企画は、平成30年度より文部科学省の「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」事業を受託しているNPO法人学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会（以下「すすめる会」という。）より、名古屋で開催する「障害者の学びの場づくりコンファレンス in AICHI」の連動企画として、横溝さやかさんの紙芝居公演会と展示会を「犬山市で開催しませんか」というお声がけをいただいたところから始まりました。

公演会の開催は、すすめる会が令和元年度まで名古屋で開催した生涯学習セミナーでも実施しており、そのノウハウを活かして令和2年度は犬山市で開催するものです。

この事業を実施するにあたり、犬山市の福祉関係者の協力も欠かせないことから、犬山市障害者自立支援協議会の協力を得て犬山市で実施する運びとなりました。

しかし、新型コロナウイルス感染症収束の見通しが立たない中でどこまで実施できるのか。当初から不安を強く抱えながら、手探りで進めることとなりました。

<すすめる会と犬山市事務局との打合せ>

令和2年10月23日（金）13：30～ 犬山市役所

- すすめる会より本企画の説明あり。
- すすめる会より犬山市と犬山市教育委員会への後援依頼あり。→後日「後援」承認
- 犬山市障害者自立支援協議会運営会に事務局より提案し判断を仰ぐことにする。

<犬山市障害者自立支援協議会 運営会議へ企画提案・承認>

令和2年11月4日（水）13：30～ 犬山市役所

出席者：会長、副会長、各部長と協議会事務局(障害者基幹相談支援センター)、福祉課職員(連携協議会委員含む)

- 事業概要説明
- 運営委員の意見
 - ・協議会として協力するのであれば、横溝さんの紙芝居や作品展をただ開催するだけでなく、彼女が絵を描き紙芝居を始めた過程がわかるとよい。ただ公演と絵をみて、「この人は凄い」で終わってしまわないように。ここに至るまでの本人の思いや支援者の関わり方などを伝えたい。
 - ・地域の障害者の絵を飾るのは、横溝さんに失礼では？福祉事業所の紹介とかもいいのではないかな？
 - ・事業の主旨は理解した。しかし今はコロナがある。事業所は感染予防対策で精一杯。今は利用者への声掛けも難しい状況。どこまで協力できるかわからない。
- 自立支援協議会の「協催」承認。

<新型コロナウイルス感染症（第2波）の影響により活動自粛->

<すすめる会と犬山市事務局との打合せ>

随時：電話・メールを利用して打合せ。

- ・ 自立支援協議会の意見を伝え、横溝さんの生い立ちなどがわかるものの展示を。
- ・ コロナが収束しないため、当事者による実行委員会設立を断念
(名古屋と犬山の障害青年の交流を、当日の活動を通して深めることとする。)
- ・ 障害者作品の募集は、当事者や家族、支援者へ参加協力を依頼する。
- ・ 会場レイアウトと横溝さんの展示作品数など、すすめる会と文部科学省で調整

日時：令和2年12月8日（火）13：30～ 犬山市役所

- ・ 作品展で人気投票をやったらどうかとすすめる会より提案あり。
- ・ 上位3作品には粗品進呈。
- ・ 募集チラシの確認→人気投票も追加する。
- ・ 紙芝居公演会は、事業所からの参加は難しいため個人参加を声掛けしている。
- ・ 展示会は密を回避して開催する。出展や見学の呼びかけをしている。
- ・ 搬入・搬出、会場備品、当日スケジュールなど打合せ

<犬山市障害者自立支援協議会にて絵画・書道作品募集>

- ・ 募集チラシを市内障害福祉関係事業所、障害者団体などへ配布
- ・ 福祉課窓口で周知。市ホームページ掲載
- ・ 紙芝居公演の司会進行者、作品展受付者選定。随時個別に打合せ。

<新型コロナウイルス感染症（第3波）の影響により自粛->

<愛知県に緊急事態宣言発令->

<「障害者の学びの場づくりコンファレンス inAICHI」連動企画 開催>

紙芝居公演会は中止。作品展のみ開催（令和3年1月10日～15日）



<受付スタッフの声> -抜粋-

- ・今回は受付での参加だったけど今度、展示会があったら出展してみたい。
- ・B型の仕事とは違う役目で楽しかった。
- ・午後からくる名古屋の人ともっと話したかった。
- ・継続的に働くのは難しいけど単発でこういった機会があるならまたやりたい。
- ・次あるなら自分でも絵を出して事業所の人に見に来てもらいたい。



受付と案内もしたよ。



<来場者の声> -抜粋-

- ・絵を楽しんで描いているのが伝わる。色使いや題材がどれも個性的でみていて飽きない。
- ・描いた人がどんな人なのか知りたくなった。
- ・自分より上手いと思う。障害があってもこれだけ描けるんだね。
- ・絵の説明やコメントがあったら絵への理解が深まってもっと良かった。

来場者数 ●●人

投票数 108票

出展者数 21人

金賞：杉浦正典さん

銀賞：林 蓮智さん

銅賞：立藤絆吏さん

<出展者の声> -抜粋-

- ・趣味で絵を描いているが、こういう展示会があると目標になってうれしい。
- ・普段は絵を描かない利用者も展示会を理由に絵を描いたところ思いがけないセンスを見せてくれ驚いた。(支援者)
- ・誰かが見てくれると思うと一生懸命描ける。
- ・賞品が出ると描く意欲がわく。
- ・また展示会を開催して欲しい。

金



銀



銅



<おわりに>

当初から心配をしていましたが、残念ながら横溝さんの公演会は中止となってしまいました。社会情勢を考えれば仕方がないことですがとても残念でした。しかし、展示会だけはなんとか開催することができました。

横溝さんの未公開作品を含めた展示会は、前日のコンファレンス（オンライン）で紙芝居公演を観られた方も犬山まで足を運んでくださり、地元の方を含め多くの方に展示会へお越しいただき、とてもうれしく思います。

本企画により犬山の障害者作品展を開催することとなり、普段の姿からは知ることのなかった新たな一面を垣間見る機会となりました。出展者や関係者からも歓びの声が寄せられ、この作品展は今後も継続して開催していきたいと思えます。

新型コロナウイルス感染症拡大さえなければ、昨年までの生涯学習セミナーのように、犬山の障害青年たちで紙芝居公演の進行方法や、横溝さんへの質問、展示会の運営方法など、皆が主体となって意見を出し合い、公演会と展示会を作りあげ実行する体験ができ、達成感を味わうことができたでしょう。コロナ禍が収束したら再チャレンジしたいと考えています。

この企画にご協力をいただきました当事者、関係者のみなさまに深く感謝申し上げます。



6. 総括 一実践研究委託事業3年間のまとめにかえて一

田中良三（文科省本委託事業コーディネーター）

1. 文部科学省の障害者生涯学習支援推進政策

文部科学省は、2016年12月14日、2017年度から、これまでの障害児の学校教育政策から、障害児・者の「生涯学習」政策へ転換を図ることを表明した。それは、2つの文書からなっている。

一つは、「障がい者支援の総合的な推進に関する大臣講話」（松野博一文部科学大臣）である。もう一つは、「文部科学省が所管する分野における障がい者施策の意識改革と抜本的な拡充～学校教育政策から『生涯学習』政策へ」（特別支援総合プロジェクト タスクフォース）である。後者の文書は次のように述べている。

「1. はじめに」

- ・これまで、文部科学省における障害者施策は、特別支援教育をはじめとする学校教育政策を中心に展開されており、学校を卒業した後については、障害者雇用や障害福祉サービスによる就労支援、生活支援といった労働・福祉政策に委ねられてきた。
- ・しかしながら、障害者が学校を卒業した後の豊かで充実したライフスタイルを思い描くときに、企業や障害者就労施設等といった「就労の場」とそれ以外の「日常生活の場」だけではなく、文化やスポーツに親しんだり、新しいことを学んだりする「生涯学習の場」を忘れてはならない。学びは、すべての人々にとって、学校を卒業した後も、あらゆるライフステージでの夢や希望を支える役割を担っているものであり、従来の学校教育政策を中心とする障害者政策から一歩進めて、障害者の生涯にわたる学習を通じた生き甲斐づくり、地域との繋がりづくりを推進し、「障害者の自己実現を目指す生涯学習政策を総合的に展開していかなければならない。

「2. 障害者の生涯学習施策推進の視点」

- ・人が豊かな人生を送っていこうとすれば、単に生活が保障され、仕事を通じて賃金を得、社会における役割を確認していくのみならず、学習、文化、スポーツといった生涯にわたる学習や体験の中から生き甲斐を見つけ、人と繋がっていくことが必要。
- ・障害者であっても生涯にわたって学び続けることができるよう取り組み、生き甲斐づくり、地域との繋がりづくりを障害者施策の目的の中に位置づけていく意識改革と抜本的な拡充が、文部科学省に求められている。
- ・文部科学省においては平成 29 年度以降、このような視点を踏まえた課題への対応が必要である。

「3. 文部科学省において取り組むべき課題について」

- (1) 障害者の学びを総合的に支援するための企画立案部門の創設
- ・生涯学習政策局に「特別支援総合プロジェクト特命チーム」を設置し、省横断的な推進体制を確立するとともに、速やかに「障害者学習企画室」（仮称）を置くことを目指す。
- ・特命チーム及び障害者学習企画室は、生涯学習政策局で実施する施策に留まらず、初等中等教育、高等教育、スポーツ、文化の全体的な施策にわたって、省内の各部局と調整しつつ、文部科学省が所管する分野における障害者施策の意識改革と抜本的な拡充の旗手としての役割を果たす。
- (2) 生涯を通じた学び、文化・スポーツ等において取り組むべき課題について（略）
- (3) 教育分野において取り組むべき課題について（略）

文部科学省は、障害者の生涯学習についての上述の基本方針をもとに、2017 年度は「障害者学習支援推進室」を設置し、省内の関係予算を整理し、また、新たな政策方針の立案や学校卒業後

における障害者の学びに関する有識者会議を立ち上げ、財源の確保など政策化に向けて基礎的整備を行った。そして、2018年度から、新たな政策の具体化＝事業化に取り掛かった。「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」（予算1億6百万円）である。(1)障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究、(2)生涯学習を通じた共生社会の実現に関する調査研究、(3)人材育成のための研修会・フォーラムの開催等、の三つの事業から成り立っている。その趣旨は、「学校卒業後の障害者が社会で自立して生きるために必要となる力を維持・開発・伸長し、共生社会の実現に向けた取組を推進することが急務。このため、学校卒業後の障害者について、学校から社会への移行期や人生の各ステージにおける効果的な学習に係る具体的な学習プログラムや実施体制等に関する実証的な研究開発を行い、成果を全国に普及することである。

これらの事業の中心である「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」では、効果的な学習に係る具体的な学習プログラムや実施体制、地域の生涯学習、教育、スポーツ、文化、福祉、労働等の関係機関・団体等との連携の在り方、特別支援教育や障害者福祉等の専門的知見を有するコーディネーター・指導者の配置やボランティアの活用方策に関する研究を実施することである。そして、この政策・事業は、2019・2020年度と継続され拡充が図られてきた。

この政策推進の基になっているのが、2019年3月の有識者会議『障害者の生涯学習の推進方策について―誰もが、障害の有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会を目指して―』と題する報告書である(以下、『報告書』)。ここでは、特に重視すべき視点として、(1)本人の主体的な学びの重視、(2)学校教育から卒業後における学びへの接続の円滑化、(3)福祉、労働、医療等の分野の取組と学びの連携の強化、(4)障害に関する社会全体の理解の向上、を挙げている。

これらは、障害者の生涯学習支援のあり方について、近年の実践的状況を踏まえたものであるが、画期的な政策といえる。

2. 障害者の「学校から社会への移行期」の実践

文部科学省の障害者生涯学習支援政策推進の基になっている文書は『報告書』である。この報告書の大きな特徴は、障害者の「学校から社会への移行期」に着目したことである。この視点は、全国専攻科（特別ニーズ教育）研究会が取り組んでいる、「福祉（事業）型専攻科」の実践に共通するものである。

ここでいう「福祉（事業）型専攻科」とは、後期中等教育の年限延長としての高等部本科三年間にプラス専攻科の設置を目標とする運動の中で、学校の代替措置として、障害者総合支援法における自立訓練事業や就労移行支援事業、生活介護事業を活用した青年期の学びの取り組みである。『報告書』では、「福祉（事業）型専攻科」の取り組みは、「障害福祉サービスと連携した学びの場づくり」として位置づけられている。

「福祉（事業）型専攻科」は、学校卒業後の継続教育としての生涯学習支援の場として光が当てられた。

この点に関して、私は第4回有識者会議（2018年5月23日）において補足説明を行う機会が与えられた（配布資料4-2）。「自立訓練事業等を活用した『学校から社会への移行期』における学びのプログラム及び支援について(メモ)」と題し、次のように述べた（以下、【補足説明】）。

[成果=問題提起]

- ① 学校から社会への移行支援に、「学び」を中心においている。学び活動は、1日午前一つ(90分)、午後一つ(90分)など、障害者一人一人の多様な個性や持ち味を引き出し生かすことができるように、大卒の時間設定をしている。

- ② 学校で身に付けた資質・能力を更に維持・開発するために、作業による技能の取得や就業体験・職場実習など職業に必要なスキルや、多様な生活体験・ボランティア活動などの社会体験によるライフスキルとともに、文化・教養・スポーツなど青年期にふさわしい多様な学習内容で構成している。
- ③ 子どもから大人への青年期教育として、障害青年たち自ら主体的・協働的に調べ・まとめ・発表し、自分たちで学習や交流を企画するなどのスキルを身につけさせる学習によって、人と関わる力(コミュニケーション能力や社会性)を身につけ、自ら判断・行動し自立できるように支援している。
- ④ 就業し自立した生活を送る基盤となる力を身につけるための多様な学び活動においては、ありのままの自分が出せ、安心して学びあうことができる仲間やスタッフのもとで、満更でもない自分を発見するなど自己肯定感や自信が持てるよう取り組まれている。
- ⑤ 学校から社会への移行期の学び支援は、修了後の就労率も極めて高く、就労を継続し、また、就労後の相談活動などによって生活も安定するなど、十分な効果を発揮している。いっぽう、障害青年の学びのニーズが多様化し、「学校から社会への移行期」における学び期間は、当初の2年間から、3～4年間と長期化する傾向にある。

[課題=求められる方策]

- ① 自立訓練事業等を活用した「学校から社会への移行期」における学びを修了し、巣立っていった受講生に、その後の学びにどう繋いでいくのかということが問われている。各事業所が、修了生等対象に公開講座のような形で学びの場を提供していくことや、また、地域の公的社會教育機関等と連携し、障害者生涯学習支援地域ネットワークづくりの中核的な担い手となることが求められている。
そのためには、各事業所等が自ら修了後のプログラムの開発を行い実施体制のモデル等の普及に努力する必要がある。そのための専任スタッフが必要である。ここでは、実践家や専門家を地方公共団体や事業所等に派遣して、先進的な事例やノウハウを提供する支援体制を構築する必要がある。
- ② 自立訓練事業等が、「学校から社会への移行期」における学びの場としての一定の要件を満たすことができるように、全国をブロック毎に、地方公共団体担当者向けの研修や事業者等向けの各種研修を実施する必要がある。

【補足説明】では、さらに、当時の全国の「福祉(事業)型専攻科」41カ所の一覧表と、「福祉(事業型)専攻科」といわれる自立訓練事業所等5カ所についての資料等を添付した。

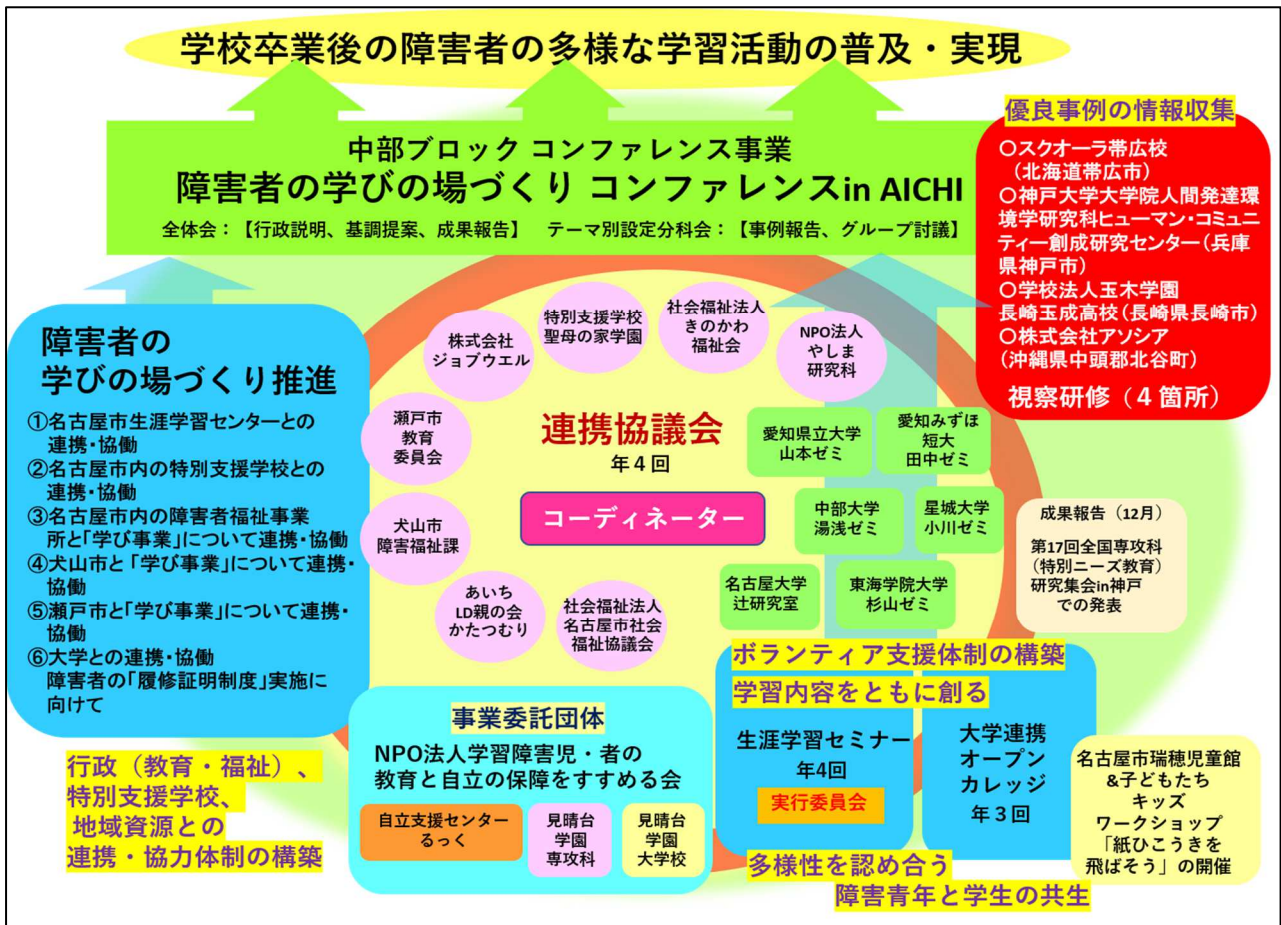
3. コンファレンスを通して

2021年1月9日に実施したコンファレンス(「障害者の学びの場づくり in AICHI」)は、東海・北陸ブロックで唯一文部科学省の委託を受けたNPO法人学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会の実践研究事業3年目のまとめとして実施した。

午前中の「成果報告」として発表された「生涯学習セミナー」は、【補足説明】において[課題]として指摘した点について、その後、本委託事業で新たに実践化を図ったものである。

また「大学連携オープンカレッジ」の報告は、【補足説明】後、障害のあるなしを超えて共に学び育ち合う共生社会をテーマに、ブラックボックスとなっている青年期に視点をあて、本委託事業で新たな実践に挑戦した取り組みである。

以下の図は、実践研究委託事業3年目の当初の企画案である。「生涯学習セミナー」と「大学連携オープンカレッジ」の各事業の位置を明らかにしている。しかし、その後のコロナ禍の対応のなかで、当初の計画は大幅に縮小・変更を余儀なくされた。



【補足説明】は、午後の事例検討会の「B. 学校から社会への移行期の実践〈卒業後から学校へ〉」に直接関わり、また、「A. 学校から社会への移行期の実践〈学校から卒業後へ〉」とも密接に関係している。

【補足説明】では、卒業後の「福祉(事業)型専攻科」しか取り上げることができなかったが、このコンファレンスでは、障害者の「学校から社会への移行期の学び」を学校からの移行期と卒業後の移行期の双方向から取り上げて検討した。

「C. ライフステージに応じた学びの実践」の事例検討では、全国各地に障害者の生涯学習支援に関する多種多様な取り組みがあるが、公的な社会教育機関が障害者の生涯学習支援に継続して取り組んできた市区町村は全国にほとんどない。そこでこのコンファレンスでは、地域で長年取り組まれてきた公的な生涯学習支援の事例を取り上げた。今後、全国のモデルケースとして参考にされることが期待できる。

これらの点に関わって、私ごとで恐縮だが、私は1980年代、名古屋市社会教育センター(現在、生涯学習センター)で障害青年対象の各種講座や、私が住む春日井市で障害者「共同青年学級」に約10年間にわたって取り組んだ。1990年代、LD(現在の知的・発達障害)児の親をはじめ関係者と行き場のなかった子どもたちのためのフリースクール・5年制の高校「見晴台学園」を設置し学園長を12年間勤めた。また、2000年代に、当時の勤務先の大学で生涯発達研究所事業として障害青年対象のオープンカレッジに、10年間にわたって取り組んだ。そして現在は、民間のフリースクール大学版というべき見晴台学園大学校で、知的・発達障害青年の生涯学習の一環とし

て大学教育実践に取り組んでやがて10年になる。

(出典) 田中良三・藤井克徳・藤本文朗編著『障がい者が学び続けるということ—生涯学習を権利として—』新日本出版社、2016年3月

以上、障害者の学校から社会への移行期の学びを中心に、文部科学省の障害者学習支援推進政策、有識者会議『報告書』、第4回有識者会議における【補足説明】に、本コンファレンスにおける委託実践研究事業3年目の成果発表と全国の先進的な事例報告を関連づけて総括を試みた。

編集後記

文部科学省から3年目の委託を受けた本事業は、コロナ禍拡大防止のために、当初企画した事業の回数を減らしたり、また、規模の縮小を余儀なくされました。本「報告集」は、このような3年目の事業のまとめに加え、これまで3年間の総まとめという意味もあり、内容上も編集上も工夫が必要でした。しかし、最終の事業となったコンファレンスで3年間の成果報告等を行なった関係で、幸いその内容を収録することができました。また、3年間の総まとめとして、連携協議会委員のみなさんに、これまでの3年間を振り返って一筆書いていただいたことで、より総まとめにふさわしいものとなりました。そして何より、今後の「障害者の学びの場づくり」への貴重なご意見をいただいたと思います。

この3年間、編集実務を担ってくれたみなさん、そしてご協力いただいた多くの方々に深く感謝申し上げます。（田中 良三）

令和二年度 文部科学省「障害者の多様な学習活動を総合的に支援するための実践研究」委託事業(3年目)

「生涯の学びとしての、障害青年の『学校から社会への移行期』における継続的な学習の役割と課題」(報告書 <2020年度>)

発行日 2021年2月19日

発行者 NPO法人 学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会

本事業事務局 見晴台学園大学

〒454-0871 名古屋市中川区柳森町 2708 板倉ビル2F

Tel. 052-355-6752

E-mail : daigaku@miharashidai.com